

ひな勇はん

宮本百合子

青空文庫

いつでも黒い被衣を着て切下げて居た祖母と京都に行つて居たのは丁度六月末池の水草に白い豆の様な花のポツリポツリと見え始める頃から紫陽花のあせる頃までで私にはかなり長い旅であつた。祖母の弟の家にやつかいになつて居てすっかり京都式にその日その日と暮して居た。夜のはなやかな祇園のそばに家があつた。んで夜がかなり更けるまでなまめいた女の声、太鼓や三味の響が聞えて居る中でまるで極楽にでも行く様な氣持で音の中につつまれて眠りについたのは私には忘られないほどうれしい、氣持のいいねつき様であつた。大きなリボンを蝶々の様にかけて大形の友禪の着物に帯は赤か紫ときまつて居た。どんな□時でも足袋は祖

母の云いつけではかせられ新らしい雪駄に赤い緒のすがったのを
はいて居た。そんな華な私の好きらしい暮し方をして居る内に一
人の私より一つ年上の舞子と御友達になった。名は雛勇本名は山
崎のお妙ちゃんタエと云う子だった。純京都式の眉のまんまるくすり
つけてあるひたえのせまい、髪の濃い口のシヨッピリとした女だ
った。私はおたえちゃんと呼んで見たりうろ覚えに「雛勇はん」
と呼んであとで笑ったりして居た。「お百合ちゃん」私はいつで
も斯う京都に行つてからは呼ばれて居た。お妙ちゃんの家は私達
の居た家から三軒ほど北にあつた、格子で高いポツクリの鈴のつ
いたのが一つばいならべてある御神燈のつつてある——こんなも
のを見つけない私にはたまらないほどこう云う様子の家がうれし

かった。お友達がないんだからこんな事を云つてとがめもされなかつたもんで、ひまさえあればその格子をチアランと云わせながら「お妙ちゃんは？　雛勇さんは？」こんな事を云つてぽつくりの群の中に雪駄が妙に見える様に濃化粧に唐人まげに云つたなまめいた人の群に言葉から様子までまるで異つた私がポツンとはさまつて——それでも仲よく遊んだり話をしたりした。私が土間に立つて斯う云うと、

「早う御上り、今日は昨日よりちとおそい□御出や」お妙ちゃん
は二階から斯う云いながら二人か三人のほうばいと一緒に長い袂を肩にかついで下りて来るのが常だった。そしてその人達にとりまかれてお妙ちゃんの手につかまってみがき込んだ階子を一段ず

つ歩みしめて上ってお妙ちゃん、御きいちゃん、御ゆきちゃんこんな人達の居る部屋に行つた。天井から薬玉が下つて畳に引くほど太いうちひもが色々な色に美しく下つて居る。どんな時に行つても白い小猫が緋縮緬の銀の鈴のついたくびわをはめてその時にじやれて居る。赤い八二重の被のかかつた鏡台の前には白粉の瓶、紅、はけ、こんなものがなつかしい香りをはなして三つも四つも並べてあつた。黒ぬりの衣袴には友禅の長襦袢や振袖やたまにはさぞ重いだらうと思う様な大変な帯もかかつて居る事があつた。こんな何となくうきうきした部屋にはいつでも日がよくあたつて居た。ホカホカとした光線が柱によりかかつて猫をじやらして居る人の半面をすき通るようにてらしたり八二重の鏡かけが動

きだしはしまいかと思うほどういて見える時には私はいつでも日のとどかないところからお妙ちゃんと二人で手をにぎりあつてジーツと見つめて居た。

「東京の話してちょうだい」

私のコロツとした指を一本一本ひっぱりながらよくそう云つた。

「話すよかもよつぽどつまらないとこだワ、こんな加茂川もなければ都踊りだつてなし私東京よりよつぽどこの方がすき」青いたたみを見つめながら斯う云うのを、

「うまい事云うてなはる、そんな事云わんと教えてちょうだい」こんな事をみんなから云われて私はなるたけ奇麗なところとところを選んで話した、「あんたは話しが上手やさかい——ほんまに目

の前に見えるようや、そうやけ」こんな話を話をさせてはお妙ちやんが云つて居た。そんなにしやべったりふざけたりしたのは三度ほど行つた時の事で、始めてそう云う家に入つた時の何となし嬉しい様な恐ろしい様な私は大形のメリンスの着物の袂をキツシリとつかみながら土間に立つた。そこへかおを出したお妙ちゃん
は、

「マアマアほんまにようきなはつた早う御上り、まつてたのやから」こう云つて私の手をひっぱつた。うしお染の横きりの細形の体にはたまらなく似合うのを着てまっかな帯をダラリと猫じやらしに結んでチャンと御化粧がしてあつた。こんな処で見るよりも倍も美しい様子のお妙ちゃんにひっぱられたまんま三味線や鼓

や太鼓のどつきりかけてある部屋を通った、そこには眉の青い丸まげの女が坐っていた。

その女は私のかおを見るときもう前あいから知って居る様に軽々すべる様な京言葉でいろんな御あいそを云った。私は袂の先をひっぱりながらだまつて笑つて居た。そして二階の部屋につれてかれたのだけれ共何となく気がさす様な風で二人きりでお妙ちゃんとする様な話は出来なかった。じきに私は雪駄をつっかけて出てしまった。「もうあんな事へ行くまい二人きりであの橋のわきで話してた方がいいんだもの」道々こんな事を考えて歩いて居た。その夜私はどうした訳か鏡台の赤い被いが目についてどうしても早くねつかれなかった。

朝目が覚めるとすぐ「今日も行つて見よう、一日中ぼんやりしてはとうてい居られないからそれにお妙ちゃんに会いたいしするから」斯んな事を思つて御飯をたべてきのうと同じ着物をきてきのうよりはよっぽど大胆に「お妙ちゃんは？」つて云う事が出来た。二階でお妙ちゃんは朝化粧をして居た。私はその後立って鏡の中の雛勇はんの何とも云われないほどきれいなふつくらしした胸のたたりとまっかな襦袢の袖の胸を被つて居るのを見て居た。お妙ちゃんは時々手をやめては、器用に顔の形を変えて、「これがマア」と云われる様なおどけた様子をして見せた。そんな事に大きなびつくりするほどの声で笑いながら御化粧がすむのをまつて居た。白い猫をからかつて居る間に雛勇はんは後に来て私の髪

の毛と自分の髪をより合わせて居た。私はそれにどんな意味があるかと云う事も知って居たんでしらんぷりをして後を向いて居た。「嬉しい！」お妙ちゃん小さい声でこう云った時私はしずかに後をむいた。「私も嬉しいわお妙ちゃん」笑いながらこんな事を云った。「マア、あんたはん知っておいでやはるの、こんな事……」私はだまってその張のある目のパツとひらいたのを見て居た。「マア、そんな事どうでもいいでしょう、ほかの人どうして？」「外の人寝坊やさかえ御ふろに行つたのや」「きのう来た時何だか変で一寸も話が出来やしなかった、今日長く居ていい？」「かまわんワ一日居ても、でも夕方から座に行かにやらんさかえ」「でもおととい出たばかりだって……」

「そうや、あの角の蝶吉はんがやすみなはったさかえ、番になったのや」

「今夜どんな着物着るの？」 「あのいつもの、……けど色が今夜は水色の方を着るのや、裾が一寸あわんで気がもめるけど……」

「用ないの？」 「あとで一寸かあはんにさろうてもらうのやけど今日はあっちに行くからいいの……」 「誰か帰って来ないうちに二人きりほかきかしたくない話があつたらしちまわない？」 「あんまりありすぎるやさかえ……でもわて東京のいとはんに会ったのあんたがはじめてやさかえうれしいワ、ほんと……けどあんまり早口やさかえ話が分らん事もあるワ、けど……こんなに今仲ようしてもあんた東京に帰っておしまいやはたらもう、ここ一

足はなれたらサツパリ忘れて御仕舞やはるやろナ」「何故そんな事つてあるもんですか忘れるほど一寸つかつきあわない人には私の思つて居る事なんかはなさないから——いつまでも仲よくしてられますとも東京に帰つても、——どこのはてまで行つてもさ」

「でも不安心や、何だか忘れて御仕まいやはりそうで——そんな事の悲しい事思うと今でも涙がほんまにポロリ、ポロリつてこぼれるワナ」「そんなら一つそ起請文書いて小指を切ろうかしら」

「それもいいやろ、けど笑われるワナ、そなような事したら御座敷に出て笑われるやろキット……」

「はく情な事でもどうせそんな事しないからいいけど……。一寸会つただけでどうしてこんなに仲よくなつたのかしらん……」

「神さんの御ひき会せや、二人

で御礼参りに行つてきやはらない、じきそこやさかえ、これまで毎朝御参りして居たの……」「何故やめてしまったの行つてればいいのに——」「もういいのやきまつてしもうたのや」「何がきまつたの？ 私ちつとも分りやしない、一人でうれしがつてたつて——」「云わんほがはなや……分つとるくせしてあかん人や……」「お妙ちゃんは溢れそうに笑いながら長い袂で私を打つふりをする。

私達は二人でお互によっかかりつこをしながらこんなとりとめもない、そして美しい気持で薬玉の方や小猫や白粉の瓶や、そんなものを見ながらはなし合つて居た。すじ向いの家で二絃琴を弾いて居る。お妙ちゃんはそれにかかるい調子で合わせて居たがフ

ツとだまって私の横がおをジーツとまばたきもしないで見つめて居る。「どうして？ 何んかくつついてる？」私はこんな事をきいた。「どうもせんけど……別れてしもうた時よく思い出せる様によく見とくのや……その方がいい思うてナ」「だってまだ七月の今日十六日ですもん九月の中頃でなくつつちやあ帰りやあしないんだもの……。若しあんまり二人で別れんのがつらかったら京都の娘になっちまいますよう、ネ、そうすりやあいんだもの下らない事考えっこなし……」

「ほんまに……考えん方がいいのやけど、わての仲ようする人は皆早うどこぞへ行つてしもうたりどうでも別れにやあならん様な人ばかりやさかえ、妙なと思うてナ、それだから私が又あんた

もと思うのや……」

なりに似合わないシンミリした声でお妙ちゃんは云つて居た。こんな人達にあり勝な何となくうきうきしたパツとしたところは少なくてしんみりと内気な娘と話して居るのと少しもちがった事はない。

「貴方割合にうち気な方だ事どうしてでしょう？」「そうやナ、だれでもそう云いやはるさかえ自分でもなぜやろと思うとつてもわからんさかえ……母はんもよくして下はるし皆可愛がつて御呉れやはるけど………生れつきやろ、キット………でもいいワナ、あんたさえしつかり覚えて御呉れやはれば………忘れそうに思われてならんのエ」「どうしてそんな事思うの？ おやめなさいよ、

キツと忘れやしないから、私死ぬまで覚えてるわキツト、若し死
んじやつたらその後の事が覚らないから覚えてるんだかそうじゃ
あないんだかわからないからしようがないとしてネ」「ほんまに
あんたをたよりにしてるのやさかえ」

雛勇はんはこんなしめつぽい事を云って居る、その横がおは、
瞳をよそに動かしたくないほどの美しくしきで日光をうしろからう
けてまっしろなかおのりんかくはうすバラ色にポーツとおつて
居る。紫色にキラキラ光る沢山の髪、私は絵の——浮世絵の中か
らうき出した人を見る様な気持で居た。

フツと何と云う事なしにかかるいほほ笑みが私の頬にのぼった。

「今日はいいい日だ事、いつもよりしずかで——そいでだあれも居

なくってネエ」

「いい日や気が Boots とするほどのびやかな日……こうやって二人きりで……」

何となくそのまんま聞きすててしまいたくない様ないい調子でこんな事を云って私の手をとって自分のかおにおつつけてしまった。

「アラきたなくなりやしないかしら」ひよつとこう思ったけれ共細い手でもっておさえて居るのを——と思つてそのまんまそうつとされるまんまになつて居た。私の手にはこまっかいすべすべしたにおやかな肌がひつたりとついて居る。そしてそのやわらかさも暖ったかみもすぐにじかに私の手に感じて居る。私はお妙ちや

んと同じ早さに息をしてかるくつぶって居る長いまつ毛をつめた、紫の細かいつぶで出来て居る様にあの細いこまっかいまつ毛の一本一本がピカピカとかがやいて居る。「マア、きれいだ、何って云うんだろう、私はこんな可愛らしいきれいな人をすきにならなくっちゃあ死ぬほどすきな人に会う事は出来ないに違いない。このまつげ、この髪、この毛、そうしてマア、このバラ色のかおのリンかくと云ったら……」その美しくしさに私はも一寸で涙が流れだすほど——まぶたがあつくなくなったほどその美しくしさに感じて居た。

「ようやくとようになった。今あんまり気が立ったさかえ斯うして居たのや、どうにも斯うにもしようのないほど……ナア、涙がこ

ぼれそうやった」

「どうして？ あんな事、私が云ったから……でもそんな事考え
たってしかたがないんだもの、もうやめて面白くしましょう」

「そんな事やないワナ、私達よそのいとはん達から『ほら芸子や
まい子や』と云われてばかり居て、——そいであんな遠いところ
から来たあんたにこなにしたしゆうしてもろうて何やら妙な気が
したさかえ……」まだ十七にもならないで——私はスーツと涙が
にじんで来た。だまってお妙ちゃんの弱々した肩をだいて居た。
二人とも一言もきかないで赤い鏡かけを見て居ると急にはしご口
がにぎやかになって、「あら……おいでやす、一寸も知りません
さかえ、とんだ御邪魔」とんきような声で顔の平ったい目のはな

れた子が云った。

「あほらしい、早う来なはれ、あかん事云わぬものやひといいじめようと……わちにはお百合ちゃんがついてまっさかえ……」お妙ちゃんは今までに似ずうきうきした軽い調子で一つかたまりの花のようになつて笑つて居る三人の子にそう云つて居る。私も急に勢の出たお妙ちゃんのはでやかな様子を見て笑いながら心の中でお妙ちゃんの行末を想像して居た。「そんなら——邪魔やつたらすぐ出て来ますさかえ——ナアそうやろ」こんな事をさっきの妓が云つて手拭を手すりにかけて化粧道具を鏡台の上に置いて丸く白い顔をそろえた。

「何やら、偉う、まじめな様子や事、何かして遊ぼうナ、何んか

考て見なはれ……」雛勇はんがニコニコしながらこんなことを云い出した。「雷落しがいいワナ」一番ちいっぽけな女が云った。それにきまつて私達はまるで夢中になった様にさわいだ。

この時はじめてお妙ちゃんのうたうのをきいた、「マア、何んていい声なんだろう」私は声の余韻を追いながらうつとりとした様にこんな事を云った。「そうやろそうやろ、それやから倍も又雛勇はんがすきに御なりやはったのやけ？」

今まであんまり口数をきかなかった中位の妓が云い出した。

「そうですとも……もとからすきだったのが御うたきいたんで倍も倍もすきになったんです、どうして心配なの？ すきだつて何にも悪かないでしょう……」こんな事を平気なおして私は云い

のけた。

お妙ちゃんは私の口元を見ながらくほほ笑んで居る——その様子が又たまらないほど可愛い様子だ。私は頭ん中でこういつてやった。「どうしたってどうなったって私も私はお妙ちゃんがすきなんだから、……いいさ、だれがなんて云ったって……」そんな事を云いあつて笑つたりなんかしておひるすぎまでさわいで二時頃ビツクリした様な気持で家にかえつた。家のたたみの上に畳つて居ても「又ナー」云つて一寸私の小指のさきをつまんだお妙ちゃんの様子やあのバラ色のかおのリンかくを思うと又すぐ行きたい様な気がした。夜になったら座に行つて会おうこんな事をたのしみにして夕飯をしまうとすぐ髪を結いなおして縮緬しぼりの

長い袖の着物に白い博多を千鳥にむすんで祖母をひっぱって出かけた。

私は幕のあくたんびに御妙ちゃんの出るのがまち遠しくてまち遠しくて自分の目の前にひっぱって来たいほどになった。一番おしまいの幕の一時に大沢の舞子の出た中に端から二番目に花がさをもって立つて居るのがお妙ちゃんだった。私はフツと少し立ち上った。お妙ちゃんはまだ見つけて居ない。こつちをむくたんびに私はのび上った。フツと思わない時にお妙ちゃんは見つけたものと見えてその次にこつちを見た事には笑って居た。幕が下るとすぐ男が私の様子をジロジロ見ながら「雛勇はんが着変るまでまっとくれなはれとことづけと云う事でござりますから」こんな事

を云つて居た。私は外に立つて樂屋から出て来る一人一人を目をはなさず見て居た。「まつとりやすの、あの人もうとうに家へかえりやしたワ」あの小つぽけなのが私のまるで知らないのと二人でこんな事を云つて肩をたたいて行つてしまった。雛勇はんはなかなか出て来ない。「もしかするとあの妓が云つたのがほんとうなのかも知れないけど」こんな事を思いながら下駄の先で小さい石つころをけとばしながらまつて居た。どつからか、ポーツといひ香りがする、階子を下りて居るらしい。「おたえちゃんだ？」何と云う事はなしにフツと思った。そして白い足袋につつまれた足がせまい階子を下りて来る、あやぶげな様を思つて「若しおつこつたら！」こんな下らない心配におそわれて居た。ぽっくりの

音をすぐそばでさせて、

「ようまつてて御呉れやはった、わてキツともう御帰りやはったろうつて云つとったやに——」

お妙ちゃんはこの事を云いながら石つころの多いところを高い下駄に長い着物を着て居ながら器用に歩いて居た。「今夜のよな時、いつまでもいつまでもおきて話して見たい様だ事」一人ごとともつかずにこんな事を云ったけれども御妙ちゃんは何とも云わないで白い足と手とかおだけ闇の中にホンノリとうき出さしてうつむき勝にあるいて居た。私は自分の家を通り越して御妙ちゃんを送りこんでから家にかえった——。こんな様なまるで恋中の様な日は毎日毎日つづいた。そして千羽鶴をおって糸を通す針で

小指をついたんで母はんに紅絹もみでつつんでもらったら友達が私に小指をきったんだろうって云われたなんかって云う事があつた。一日一日と立つごとに私とお妙ちゃん雛勇はんとは段々仲がよくなるばかりであつた。お妙ちゃんの家に行きはじめてから二十日ほど立つた日私はおひるをたべるとすぐいつもの格子の外にたつた。いつも一番さきに通るあの眉の青い女房のところから何か云つてきかせて居る様な声がひびいて居る。「どうしたのかしら」私はきき耳をたてて居るとしばらくして云つたもう一つの声がどうしてもお妙ちゃんらしい。何と云うわけもなくただおびやかされた様な氣になつて私は身ぶるいをした、そして、あけようとしたのをそのまんまぬき足に一間位あるいてあとは一散走りに走つ

て内にかけて込んでホーツと息をついて白い眼をして後をふりつかえった。その日一のわだかまりのある情ない一寸の事でもすぐ涙をこぼしそうな日だった。翌日私はこらえきれなくなつて早ずぎると思ひながらも出かけた。お妙ちゃんはまだ起きて居た、手まねぎをするのでそのまんまいつもの二階に上つた。どことなくいつもと變つて陰氣が目に見えて居る様な氣をして私のかおを見る。とだまつたまんま、細いしなやかな首を私の肩にがつくりともたせかけてしまった。「どうして？ 何かかなしい事があるの？ 私にどうか出来る事ならするけど——」せまい額を見ながら斯う云つた。「エエ、そんなに悲しい事でもないのやけどマア、こうなのや、きいてナ。□□きんの母はんが下に呼んでお云いやはつ

た事だワ、あんまりお百合ちゃんと仲よくして居ると變に思う人があるといけないってナ云ってやはるさかえ『何が變やろ』云うたらナ母はんがお怒りやしたのけど一寸もわけが分らんさかえ考えてるのやー」

こんな事をお妙ちゃんはいかにも心配そうに大切そうに云って居る。「そんな事、何でもない事なんでしょう。氣にそんなにかけずといいじゃあないの、私達どうしたって今仲悪くなる事は出来ないんですもん」こんな事を云ってほかの人達と雷落しや話しつつくだのつて下らない事をしてさわいだ。御妙ちゃんのたんすの上の花びんにまっしろなてつぽう百合がいかって居た。四時頃何とか云う茶屋からかかつて行かなくっちゃあならないと云って

着物を着かえたりなんかしながらも「お百合ちゃんお百合ちゃん」をくり返して居た。私は一緒にそのお茶屋の一町手前まで送って行つた。毎日毎日私の頭ん中には「お妙ちゃん、雛勇はん」こう云う名でもつてみたされて居た。ひまさえあれば一緒に何でもをして居た。お妙ちゃんの出る時には毎日でも踊見に出かけた。そうしては暗い夜道を二人で歩くのがこの上もないたのしみな事だつた。そんな事をして八月も中頃になつた。祖母は時に思い出した様に折々「帰ろうかネーもう随分居たんだから——」こんな事を云つて居たけれ共私は懸命にもつと居る様に居る様にとすすめて居た。祖母は九月の十日頃には帰ろう、こんな事をもうちゃんときめてしまつて私にもうどうにもならない様になつてから云い

わたされた。八月の二十九日頃であつた。私のかお色はキツトどうかなつたに違いないけれどもジーツと祖母の瞳を見つめて居たが急に家をとび出してお妙ちゃんのところに行つた。この頃私はもうじきどうしても帰らなくっちゃあならない時が近づいた様な気がして居たんでどんな事であつた日にでも一日に一度はキツトお妙ちゃんの家に行つて居た。用事もないらしいのんきなかおをして居るのを見ては「マアよかった、まだ帰るには間があるらしい」と思つて安心して居るらしく私には思われて居た。よろこんで居るのに——と思うとどうしても私は云い出す事が出来なかつた。二人は手を握りあつてしずかな真昼の空気の中にひたつて居た。「あのネ、おたえちゃん、私が若し帰るとすると帰る日なん

か前つからきまつた方がいい、それともその前の日ぐらい急にきいた方がいい、どちら？」何でもなさそうな様子で私はたずねた。「そうやなあ、いつきいても悲しい事やけど——前へ久しい時にきいた方がいいと思うワ、思うだけの事が出来るから……」こんな事をお妙ちゃんは深い考えもなくつて答えて呉れた。私は私はどうにも斯うにもならない様な重い曇った氣持をわざとかくす様に押し出す様な笑い方をして見たりわざと下らないじようだんをしたりして家に帰る時には涙をこぼして居た。まるで見もしらない舞姫なんかとどうしてこんな涙の出るほど別れるのがいやになつたんだらう、どうして仲がよくなつたんだらう、そんな事を考えながら私はポロポロと涙をこぼして居た。翌朝私は目を覺すと

すぐ行こうかとも思ったけれどどうしてもその気になれないのでお互に気のせかせかして居る時の方が却って好いと思つたんでわざと三時すぎにお妙ちゃんの家に行つた。丁度御化粧のおしまいになつたばかりの時であつた。私とお妙ちゃんとはだまつて座つて居る、そして二人とも涙をこぼして居る。お妙ちゃんも一言も云わず私もだまつて居る。

「でもマア、悲しいけどよう教えて御呉れやはつた」

お妙ちゃんは消えそうな声でこんな事を云つて居た。私は自分ののはれものにさわるよりなおおそろしくその結果の思いやられて居た割にお妙ちゃんがはつきりして居て呉れたと云う事は幾分かあてがはずれた様な気もするけれど共思つてることをこらえて

見るんだろうと思うとあからさまに表わされたよりはるかに私の心には深く鋭く感じて居た。その日お妙ちゃんはまだ「忘れないで呉れ、忘れないで呉れ」とくり返して居た。そして出がにかかるまで何にもしないで二人で手を握りあつて居た。

その翌日もその翌日も、私はお妙ちゃんのところへ行つた。

私達は前の様にしゃべったりふざけたりはしずだまつて手を握り合つてもたれあつてそして時々互に涙をこぼしたりつかれた様なほほ笑みをかわしたりして居た。そうして人間の力でどうする事も出来ない時は私達の別れる時を段々迫らして来た。そして私達がそれを思つて身ぶるいをして居る九月の九日になつてしまつた。朝起きぬけから二人は一緒に居た。そうして長い間話しもし

ず御飯もたべず只御互の手をなでて見たりしつとりとうるんだ瞳を見つめあつて居たり頬ずりをして見たりそうして夜になつてしまつた。私達は十一時半の列車でたつ事になつて居た。そしてその晩はお妙ちゃんとは都踊りに出る日だつた。私はもうこれつきりと思つて東京にかえる着物を着て一番よく見える所をと選んで座つた。幕のあく前にお妙ちゃんは私のところに来てジツとひぎにもたれかかつて居た。もう舞台着をつけて居た。私はそのえり足、うす赤い耳たぼそう云うものを見て居るとたまらないほど涙が出て来た。人に見られまいと私はいろいろ苦心して出たくもないあくびをしたりして居た。やがて楽屋の用意が出来たしらせがあるとお妙ちゃんとは長い袂の中から紫の縮緬のふくさに包んだ小さな

しかし中のなつかしそうなものを出して「またいつ逢うか……それまでの御かたみや」小さい声でこう云つて居た。私も大急ぎで懷の中のはこせこを出して中に入つて居た紙くずなんかぬいてそつと紫のふくさの入つて居た袂に入れた。紫地に花鳥を縫いつぶしたのはこせこ紙入れをかねて居る様なものだった。お妙ちゃんはそのをそうつと抱きあげてしつかりと抱えながら私の目を見つめて居たが急に「お忘れやはるナ」こう云つて狂つた様にかんざしのかざりをふるわせて走けて行つてしまった。幕があいた時まんなか頃にお妙ちゃんは立つて居た。一つ体を動かすにも一つ手を動かせるにもその時々になげる視線にかなしく、震えながらそそがれて居た。

幕が下りるまで私はお妙ちゃんのあのあわれげな視線をうけて居る事が出来るかしらこう思いながら、見られればキツとこつちからもそれに答える心持をもつて居た。苦しい、悲しい、重い、何とも云えない気持の中に幕がおりた。私は、お妙ちゃんにも一度会ってからにしようかそれともやめようかと思つて大變に迷つたけれ共とうとう又樂屋うらのうす暗いところで「雛勇さんに樂屋下でまつてゐるつて云つ男にたのんでぽつくりの音の来るのを今か今かとまつて居た。間もなく、パタパタとなまめいた草履の音がきこえて私の胸にはお妙ちゃんがよくかかつて居た。ぽつくりがどうしたんだか目つからないでやたらに手間どるから草履のまんなまで来たんだと小さいおどつたふるえた声で云つた。「忘れない

で忘れないで」互に只夢の様な気持でくり返した。どっかの時計はもう十一時をうつて祖母は私に早くおし早くおしとせきたてて居る。「お妙ちゃん」私はもう涙のいつぱいたまった声で小さくよんだ。

「お百合ちゃん——ほんまにお忘れやはるナ、わてはナ、死んでもおぼえてまつせ□□ナ、お百合ちゃん、キット、あれはなくさずに持つて居てナ、わてこれは死んだら棺の中まで入れてもらいますさかえ……」お妙ちゃんはもう氷りかたまつた様な声で斯う云つて闇をすかす様にしてしばらく私のかおを見つめて居たが急にクルリと向きなおつて暗の中へ——楽屋の方へ行つてしまった。「お百合ちゃん」耳のせい何かかすかに私の耳にひびいた。私

ももうどうにもこうにもならない様になつて紫のふくさを抱いて祖母をせきたてて列車にのりこんでしまった。私は自分の体が汽車にのつて居ると云う事はどうしても信じられなかった、ましてあんなに仲よくして居たお妙ちゃんを一人おいて来たとは——いくら考えても思われなかった。けれども早い勢でとんで居る列車は段々私をそう信じさせてしまった。私も又それを信じないわけには行かなかつた。うすつくらい寝台車の中で私は涙を又新らしくポロポロこぼしながらふるえる指さきでしつかり結んである紫ふくさの結び目をといた。中からはなお私の涙を誘い出す様な青く、まっさおく光る青貝の螺鈿の小箱があつた。私がよくこれを見るとこの角々をなで廻しながら「マア、ほんまに何とえい箱や

ろ、わて心中しようと思ふ人でなければあげんのえ」こんな事を云つて居た箱だった。私はその青貝のまつさおの光の上をソーツとなでながら夜の白むまでまんじりとしなかった。斯うして新橋におろされた私は久しぶりでせわしい目まぐるしい様子を見ながらもお妙ちゃんの事を思わずには居られなかった。家に帰った。すぐ私はお妙ちゃんのところへわざわざきれいなのをそろえて手紙を出した。細い細い心書きで書いて三ひろほどもそれ私を目を涙でひからせて投げ込んだ。五日立った日に返事が来た。クモのあの銀色の糸のおのきの様なかすかにはかなくそして又ないほど美しい――、そうした気持のする返事であつた、字一字の間にもあの赤い色と白粉の香りはしみ込んで居る様に思われ

た。四日にあげず手紙をやりとりして居た。時には只一輪なでしこを封じ込めたのもあつた。時には読みつかれるほど書いたのもあつた。どれでも、どんなんでも皆私にはこの上なくうれしいたよりであつた。

今年の秋の淋しさと云つたら——私はまるで病んで居る様に只淋しい気持が自分で可愛そうな様になつた、それでも遠くに分れて居る私達は思つたまんまを手紙に書いてはなぐさめあつて居た。十月十一月十二月正月二月これだけの月は淋しい思いをしながらも手紙はお妙ちゃん自身で書いたものを見る事が出来た。二月二十八日頃私が手紙を出したのに返事がなく又五日ほど立つて一通出した。それだのに——私はフット疑が起つた。けれ共どうと思

うでなく只やつぱりああ云う人にあるものずきな氣持だったかと思つて居た。そんな何となし不安心なイライラする様な日がつづいてとうとう私が泣き出した様に雨がシトシト降つて居る日だった。私の机の上に一の白い封筒が置かれた。

お妙ちゃんの居た家の名が書いてあつてお妙ちゃんの名がない。妙だと思ひながら私は中を三条り見た時マア、どんなにおどろいたんだらう。こんな悲しい知らせなら私は死んで棺に入るまでは封をきらなかつたらうにとまっさおになつてとめどなくふるえる手でその手紙をにぎつた。どうしてマアお妙ちゃんが死んだんだらう、どうして死んで又くれたんだらう——私はこの字を幾度も幾度もくり返しくり返してよんだ。どうしてもそれに違いない。

私は涙も出なかった。只何となくあんまり妙な信じる事は出来るような又出来ない様な気がしてたまらないので一つとこに居る、おゆきちゃんにあててくわしく知らせてくれと云ってやった。すぐに返事が来た。病気は何と云っても教えてよこさない、死ぬ時に私のあげたはこせこを抱いて居た事、うわ事にお百合ちゃんお百合ちゃんと云って居た事を書いてあつた。そして死ぬその時までにぎって居て死んだらこれをと云って置いた扇は少し口紅がついてますが御送り致しますと書いてあつた。青貝の螺鈿の小箱、口紅のかすかにのこる舞扇、紫ふくさ——私は只夢の中の語語りを見てるように——きくように青貝の光りにさそい出される涙、口紅のあとに思い出すあの玉虫色の唇。

お妙ちゃん——雛勇はん——斯のどっちからよんでも何となく
しおらしい舞子は私の若いおどるような心の中にあつたかい、そ
して□たない思い出をきざんで呉れたのであつた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十八卷」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第6刷発行

※底本では会話文の多くが1字下げで組まれています。注記は省略しました。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年10月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ひな勇はん

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>